

第1回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事要旨

1. 日時：平成26年7月2日（水）15:15～17:15
2. 場所：中央合同庁舎8号館5階 共用B会議室
3. 出席者

(1) 構成員

平澤座長、相澤構成員、伊集院構成員、岡崎構成員、門永構成員、西澤構成員

(2) 政府側

山本内閣府特命担当大臣（沖縄及び北方対策）、阪本内閣府審議官、石原沖縄振興局長、藤本大臣官房審議官、橋本事業振興室長、中嶋企画官、新田専門官、原専門官、矢島専門職、田原専門職

4. 議事要旨

議事1 内閣府特命担当大臣（沖縄及び北方対策）挨拶

山本内閣府特命担当大臣（沖縄及び北方対策）より、概略以下のような挨拶があった。

山本大臣：沖縄科学技術大学院大学は、沖縄において世界最高水準を目指した教育研究を行うことにより、沖縄の振興及び自立的発展並びに世界の科学技術の発展に寄与することを目的として、平成24年9月に開学した。これまで国内外から優秀な研究者、学生を迎え、学際的かつ先端的な教育研究を進めてきており、本年9月に3期生を迎える。

今般の骨太の方針において、「沖縄科学技術大学院大学（OIST）の規模拡充に向けた検討や、OIST等を核としたグローバルな知的・産業クラスターの形成の進展を図る」とされており、政府としても、OISTが世界最高水準の教育・研究を沖縄で行うことにより、世界一のイノベーション拠点となつて、更なる沖縄振興が図られることを期待している。

内閣府においては、これまでも有識者懇談会を開催してきたが、これを拡充し、中長期的な観点から、OISTの規模拡充の問題や、あるいは知的・産業クラスターの形成等々について御意見をいただくために本検討会を設置した。今後のOISTの諸課題について、より広い視点や、さまざまな角度から率直な御議論をお願いしたい。

議事2 構成員の紹介

事務局から各構成員の紹介が行われた。

議事3 検討会について（資料1-1～1-5）

事務局から資料1-1から1-5に基づき、「沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課

題に関する検討会」の開催趣旨や今後のスケジュール等が説明された。

議事4 座長の選任について

構成員の互選により、平澤構成員が座長に選任された。座長代理には、座長から榊構成員が指名された。

議事5 検討会運営要領の決定について（資料2）

「沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会運営要領（案）」が資料2のとおり決定された。

議事6 平成25年度における学園の業務実績について（資料3）

事務局から資料3に基づき、「平成25年度の学園の業務実績」について説明された後、構成員から以下のような主な意見があった。

- OISTは、独法の理事会、評議員会と違って、ボードが内容をホールドし、評価を行うシステムとして設計された。内閣府は、OISTの独自性を尊重しつつ、予算の趣旨に合っている方向に理事会がホールドし、また学長がそれを執行しているか、これを見届けていく作業になる。このような位置付けの機関は、海外では珍しくなく、日本の中でうまく定着すれば一つのモデルになり得る。
- 研究の中身そのものに対する評価は、ノーベル賞級の学者がチェアマンになって世界的に集めた学者のパネルで行われており、非常に厳しい形で行われていると理解してよい。そのプロセスは信頼できる。
- 国立大学の予算が減らされている中で、予算が増えたOISTがそれ以上にしっかりやっていると形にしないといけない。
- 評価基準においては、少なくとも何が期待値なのか、どの方向を向いているのか、見えるようにしていく必要がある。
- 本検討会がロングレンジのビジョンのもとでの検討を行い、大臣がそれを基に時局の判断で予算要求や事業計画の認可を行っていくという位置付けと理解したい。
- 教員の採用については、将来計画としてどのように新しいターゲットを定め、それにコミットできる必要な人材を採用してくるかという議論が必要。単純に年間何名かずつ増やしてよいという話にすると、自分のグループを大きくしたいというような話にしかならず、グループ内での学際性しかなく、グループ外の人と共同研究しようという話になっていかない可能性がある。
- 産学連携というと、大学発ベンチャーがよく取り上げられるが、ベンチャーを作ることは目的ではない。産業はベンチャーだけで作れるものではなく、手間がかかることを考慮すれば、むしろ避けたい性質のもの。しかし、特許を取った段階からプロトタイプを作るという過程においては、参入企業が少なく厳しいため、仕方なくベンチャーに担って貰うというのが本質である。

- ベンチャーキャピタリストが投資を行う前段階において、その投資対象に適する状態を創出するために資金供給を行う、ギャップファンドが重要となる。
- 産学連携の出発点は共同研究であり、並行してミッションオリエンテッドな研究を進めることが重要であるが、OISTの外部資金を見ると、民間企業との共同研究がまだ非常に少ない。まさにミッションをどう設定するかが重要。
- 産学連携について、21世紀型大学は、産学連携の場所と大学の研究の場所を分けて、そこを研究者が行き来しつつ、利益相反をマネジメントする仕組みを整える必要がある。
- 評価については、ピュアサイエンティフィックな評価はもちろん、それとはまったく違う評価をしないと産学連携は進まない。
- 10年後の財政支援の在り方の見直しに向けて、OISTのミッションははっきりしているので、10年後にどういう果実が期待されるのかについてのイメージを持っておきたい。

議事7 今後の検討事項・論点について（資料4-1、4-2）※資料4-2は非公表

事務局から資料4-1に基づき、本検討会における検討事項・論点の説明がされた。従来の有識者懇談会で議論してきた事項に加え、新たに「規模拡充の在り方について」や「知的・産業クラスター形成等の沖縄振興への貢献の在り方について」等の論点が挙げられた。詳細な議論については、次回行われることとなった。

(以上)